徳島新聞　２０２３年（令和５年）７月２２日　土曜日（１７）スポーツ掲載

徳島新聞社提供

第8日の成績

▷2回戦

鳴門渦潮	12—2	板野
生光学園	9—0	城北

全国高校野球選手権　第105回　**徳島大会**　第8日

高校野球の第105回全国選手権徳島大会第８日は21日、鳴門オロナミンＣ球場で２回戦の残り２試合が行われ、ベスト８が出そろった。第４シードの鳴門渦潮が12—２で板野に五回コールド勝ちし、生光学園は９—０で城北を七回コールドで破った。第９日の22日は、同球場で準々決勝２試合が行われる。

生光学園 七回に猛攻

城北、満塁の好機つぶす

▽2回戦（第2試合）

生光学園	000	100	8	9
城北	000	000	0	0

（七回コールドゲーム）

【評】生光学園が後半の集中打で圧倒した。1−0の七回、二塁打で出塁した先頭福池の代走三輪が犠打で三塁に進み、今西の中前打で生還。豊川の適時二塁打や三つの押し出し四球なども出て、この回、打者14人の猛攻で一挙8点を奪った。先発大山が6回を無失点にしのいだ。城北は左腕飯田が六回表まで1点に抑えたが、その裏の無死満塁のチャンスをつぶしたのが痛かった。

城北対生光学園　7回表、生光学園1死三塁、今西が中前打を放ち2−0とする＝鳴門オロナミンC球場（立花善晴撮影）

きょうの試合

◇鳴門オロナミンC球場

▽準々決勝

鳴門−名西（10時）

徳島商−川島（13時半）

8強出そろう

磨いたチーム力発揮

生光学園

試合の流れを決めたのは1−0で迎えた六回裏の守りだった。生光学園はポテンヒット2本とバント安打で無死満塁のピンチを迎えた。エース川勝に代わって先発した右腕大山は「決して打たれているわけではない」と冷静だった。

6番からの下位打線に大きな当たりはないと踏んだベンチは前進守備を指示した。大山は130キロ台後半の直球で押し、6、7番は内角球を詰まらせ三ゴロで本塁アウト。8番は外角球で一ゴロに仕留めた。

本格派右腕の川勝が成長し、失点が計算できるようになった今春以降、チームは守備に力を入れてきた。二つの三ゴロを落ち着いて処理した岸本主将は「練習の成果を出せた」と声を弾ませた。

続く七回表、二塁打で出た先頭福池の代走三輪が犠打で三進。ゴロなら打った瞬間に三塁走者がスタートする「ゴロゴー」のサインが出る中、打者今西がたたきつけた打球は遊撃手の頭を越え、俊足の三輪は生還。幸島監督は「内野のどこにゴロが飛んでも三輪はホームインできていた」と好スタートを褒めた。

最終七回は川勝が締めて完封リレー。昨秋は背番号1を付けた大山は春先は130キロ程度だった球速が138キロに伸びた。「同じ2年の川勝と刺激し合っている。次も出番があれば抑える」。2枚看板の投手力、堅守、機動力。チームカラーを前面に押し出した1勝となった。

（木村恭明）

【生光学園】			打	安	点	振	球
⑧		豊川	4	1	2	1	0
⑦		安藝	3	0	0	2	1
R	7	荒中	0	0	0	0	0
⑥		渡邉	2	1	1	0	2
⑤		岸本	3	1	0	0	1
③		福池	3	2	1	0	0
R		三輪	0	0	1	0	0
H	3	上田	1	1	1	0	0
④		伊佐治	2	0	1	2	1
⑨		今西	3	1	2	0	1
9		吉崎	0	0	0	0	0
①		大山	3	0	0	3	0
H		手塚	0	0	1	0	1
1		川勝	0	0	0	0	0
②		桁谷	3	1	0	0	1
犠盗失併残		11106	27	8	9	8	8

【城北】			打	安	点	振	球
⑥		渡邉	3	0	0	3	0
⑨		岡本	2	0	0	0	1
1		田中	0	0	0	0	0
H		五島	1	0	0	1	0
⑦		真開	3	2	0	1	0
④		米澤	2	1	0	0	1
②		向井	3	1	0	1	0
①	9	飯田	3	0	0	0	0
⑧		湊	2	0	0	0	0
③		田伏	3	0	0	1	0
⑤		松家	3	1	0	1	0
犠盗失併残		20008	25	5	0	8	2

▽二塁打＝福池、豊川▽盗塁＝今西▽捕逸＝向井▽試合時間＝1時間57分

投手	回	打	安	振	球	責
大山	6	26	5	6	2	0
川勝	1	3	0	2	0	0
飯田	6⅔	30	7	8	4	7
田中	⅓	6	1	0	4	2